



カレッジ情報2015

2015. 12. 8 (火) 12 月号

発行: 秋田県生涯学習センター
tel: 018-865-1171



不思議!キノコゼミ (M3) 【現地学習】「千秋公園のキノコ」

講師: 県林業研究研修センター 上席研究員 菅原 冬樹 氏ほか



講座が行われた11月6日は少し肌寒い日で、繁殖しているキノコも多くはありませんでした。しかし「千秋公園でもキノコを見つけられる」ということに、期待の表情を浮かべながら参加している方が多くいらっしゃいました。

マツなどの針葉樹にはハナヒラタケ、ミズナラなどの広葉樹にはマイタケ…というように、キノコの菌が寄生する樹木はある程度決まっていますので、植生に着目しながら山を歩くと見つけやすいそうです。今回の講座でも、公園内の樹木の種類に基づいて、どの辺りに何のキノコが生えや

すいかというポイントを多くご紹介いただきました。

また、中にはキノコが寄生したことで褐色腐れや白色腐れを起こしている樹木などもあり、生態系の中で「分解者」として位置づけられるキノコの力を知ることができました。まさに、樹木と共生関係にあることを実感しました。

食中毒防止のため、「名前の分からないキノコは採らない・食べない・人にあげない」という三原則を守ることには尽きる」と強調されていました。小さくても力強く生きる、キノコの魅力にたっぷりと触れることができました。



秋田市探訪 vol.4 (C7) 「八橋油田～石油技術者たちのふるさと～」

講師: 秋田大学国際資源学部 教授 荒戸 裕之 氏



講師の荒戸先生は、昭和57年に帝国石油に入社して石油開発の最前線に長く勤務し、現在は秋田大学にて石油技術者を養成していらっしゃいます。八橋油田は、日本国内随一の油田として、様々な掘削・採取・評価・探査技術がいち早く取り入れられました。そのことが日本の石油技術者を育てたのであり、「石油技術者たちのふるさと」と呼ぶのにふさわしい場所であることがわかりました。

講座最後の「石油の一般的な回収率はおおよそ25%程度で、あとは地下の油層にそのまま残されてしまいます。残念ながら現在の技術ではこれ以上の回収率を達成するにはたいへんな努力が必要なのですが、いずれ将来的にはその技術が確立していくでしょう。しかしその効果は、新たな油ガス田を発見することに匹敵する莫大なもので、決して無視できない分野です」との言葉は、将来のエネルギー問題を考える上で、とても印象的でした。

カレッジ情報のバックナンバーは、秋田県生涯学習センターWebサイト
<http://www.pref.akita.lg.jp/lifelong/>からダウンロードすることができます。

発掘!考古ゼミ (R1) 「土偶はなぜ腕を下ろしたのか？」

講師：県埋蔵文化財センター 所長 小林 克 氏



縄文時代中期までの土偶は、長野・神奈川などの中部地方を中心に出土し、腕を上げるか、水平に短く伸ばす『バンザイ型』が特徴です。それに対して、縄文晩期の土偶は、岩手中心の東北と茨城・千葉中心の関東に二極化した形で出土し、手脚が長くなってかぎ状に垂らす『垂らし型』へと変化します。この変化の理由を明確に説明することはできませんが、一つの可能性を提示することができます。実際の変化は、土偶に限らず、当時の土器の人体文様などにも共通して見られることでした。加えて、日本だけに見ら

れることなく、中国大陆の土器文様やバイカル湖北側に住むケット人の太鼓の文様などにも見られます。このことから、大陸から日本北方地域に『垂らし型』の意匠が伝播してきた可能性を考えることができます。まさに考古学のロマンを感じさせるお話でした。

史料で紐解く秋田の歴史 (B6)

『渋江和光日記』と秋田藩の上級武士

～後期秋田藩政と引渡・廻座の諸相～

講師：県公文書館 古文書班嘱託 渡部 紘一 氏

江戸時代後期に書かれた『渋江和光日記』が公文書館に保管されています。渋江和光は、何人もの家老職を出した渋江家の中でも「家老になれなかった人」であり、長く「御相手番」を勤めた人でした。公式行事に藩主とともに出席したり、あるいは城内行事での御座奉行として「藩の重役に当たる宿老の方々の配座」を行ったりするのが御相手番の職務で、直接政務に関わることはありませんでした。そのことから、『渋江和光日記』は当然のごとく藩政について客観的かつ批判的に書かれており、例えば天保の飢饉を巡る民衆の一揆や騒擾と藩の対応などについて、よく知ることができる史料です。翻刻され、全12巻として県公文書館より10年前に完結刊行され、図書館などで読むことができます。



学ぶためのまなび方 vol.3 (E8) 「ニュースポーツを楽しもう」

講師：県スポーツ科学センター スポーツ主事(兼)班長 工藤 強志 氏



前橋市発祥の「スマイルボウリング」と、フランス発祥のペタンクをもとにした「室内ペタンク」を楽しみました。「スマイルボウリング」は通常のボウリングを縮小したようなものです、レーン途中のゲートにボールをくぐらせてピンを狙い、全ピンを倒すまでの投数を競います。回が進むごとにゲートがピンに近づいていき、狙いが難しくなります。「室内ペタンク」はおもりの入ったゴム球を使って行います。ゴム球を投げたり転がしたりして、目標に近い玉の数を競うのですが、実際にやってみるとボールがなかなか止まらず、「転がることを前提とした作戦」が大事になります。和気あいあいと、皆さんの笑顔溢れる姿がとても印象的でした。